



朝日21 関西スクエア 会報

Asahi Kansai Square21

2011.6

No. 135



—2005年に企画運営委員を
されました。その後、仕事の場
を自宅の兵庫県加古川市から大阪に移されま
した。仕事場としては、東京の方がよかったの
ではありませんか？

主婦作家という2足のわらじをはいていた
ましたが、子育て、親の介護から卒業し、仕事場を
どこにするかで悩みました。編集者からは「東京
がいい」と誘われました。その時、夫と話し
合ったのですが、東京ならソウルでもいいの
ではないかと。ともに加古川から4時間。環境
を変えるなら異文化のほうが、より豊富な刺
激があると思いました。

—結局、大阪にされました。

09年秋に移りました。東京、東京と言いま
すが、加古川の田園地帯ですごしてきた私の目
には大阪は十分輝いています。大阪でよく耳
にするのは「活力がない」「大阪はもうあかん」
とのグチばかり。そんなのを聞いて、「この
人、何いうてんねん」と思います。東京と比較
するから、「あかん」「あかん」となるんでしょ
うが、大阪、近畿は宝物がいっぱいあると思
います。それを生かしていないだけで宝のも
ちぐされですよ。

—どのような宝物があるのでしょうか？

ラジオの仕事で10年秋から、神仏融合をテーマに「巡
拝の旅」という番組に取り組んでいます。伊勢神宮と近畿2府
4県の150のお寺と神社が08年3月に神仏霊場会を結成、
寺社を訪ねて歩く「巡拝の道」を決めました。その「道」をた
どる企画です。明治の神仏分離政策で、仏教と神道が分け
られましたが、やはりいっしょなのが日本人にとってはふ
さわしいのではないかと考える動きです。私にとってはた
くさんの発見があります。

加古川でも地元の「宝物」に取り組みました。ため池です。
加古川一帯は高級ブランド米の山田錦の産地ですが、そ
の背景には農業用水を確保するためのため池文化があり
ます。万葉集にも詠み込まれ、1000年ほど前にできたもの
もあります。しかし、農業離れで放置されるため池が目立
つようになりました。

ため池には、例えば、冬場にいったん水を抜いて空っぽ
にし、日光にさらして、汚れの元になる藻などをのぞき、水
質を保つ知恵もあるのです。放置されたため池を住民の力
で手をかけて、淡水真珠を育てる運動に力を入れたりしま
した。

昔からの知恵を「いま」に生かす工夫が必要です。真珠

玉岡 かおるさん (作家)

「関西は宝物のもちぐされ」

「きらめき」掘り起こそう

作りをめざしたのは、「パール
のお水で作った
お米」と銘打つ
ことを目標とし
ましたが、これ
は道半ばです。

—先人の知
恵には恵まれて
いると思います。しかし、いまの高層ビル群の
街並みに、宝物は果たしてあるのでしょうか？
ビルは建っても、空き室ばかりという声もあり
ます。

神戸のポートアイランドに先端医療セン
ターがあり、再生医療審査委員会委員を務め
させていただきました。患者の傷んだ足の血
管を、自身の細胞で再生する治療方法を審査
したことがあります。糖尿病・高血圧などのた
めに動脈硬化が重症になり、これまでだっ
たら足の切断に至るのを、切断せずにすむ血管
再生治療です。医療がここまできている、と感
動しました。海外からの患者も受け入れ、日本
の先進医療を活用しようとしているのですが、
「医療ビジネス」という視点と「医は福祉であ
りビジネスにしてはいけない」という意見とは

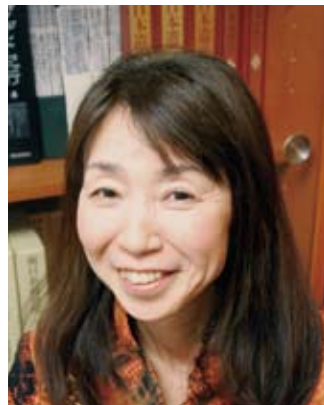
まだまだ議論されるべきだと思います。

つまり、産官学の連携でセンターという機能はでき
あがった、そしていま、それを運用するために環境整備が必
要という段階と感じています。

機能ができている、ということはすばらしいことです。そ
の受け皿をこれからどのように生かしていくかという議論
と工夫が必要ではないでしょうか。

大阪の高層ビルも、受け皿が整ったということです。ビル
街のなかで、海外ブランドが並ぶ西梅田の一角はきらめい
ていますよね。何かおもしろいことをやっている、と思わせ
るわくわく感があります。人の心をそそり、足をとめさせる
ために、まだまだ工夫できることはいっぱいあるのでは
ないでしょうか。

たまおか・かおる 1956年生まれ。兵庫県加古川市
在住の89年にデビュー。大正時代の日本最大の商社・鈴
木商店の盛衰を描いた「お家(いえ)さん」で第25回織田
作之助大賞受賞。作品は「夢食い魚のブルー・グッドバイ」
「をんな紋」「銀のみち一条」など。





東日本大震災を考える

開かれた科学技術力を関西から

若村 国夫 (岡山理科大学教授)

約3カ月も放射線をまき散らしている原発事故は、核反応の恐ろしさと、原子炉構造を理解した上での安全対策や科学知識を持った専門家による陣頭指揮の必要性を強く教えてくれた。実験物理に長年携わってきた私の経験では、失敗には必ず原因がある。原因解決への対応が次の技術の発展につながる。原発事故を負の遺産とせず、原因を見つめ、開かれた技術立国への礎としたい。まず原発のような高度な科学技術に対処できる科学技術省を新設する。所属の行政担当者には積極的な国際交流により、事実をはっきりさせる、国民の視点に立つなどの科学の基本理念を身につけてもらう。

技術社会の維持には科学の知識のみならず論理的思考力や客観的姿勢が必要だ。中学理科の教育が重要だが、今、数学や物理を苦手とする理科教員の志望者が増えてきている。技術立国の将来が危ぶまれる。これに対処するため、理科の採用試験を物理・地学と化学・生物の2分野に分け、教員の専門性を高める。県や市のレベルで実施可能なので、科学力向上の西風を吹かせたい。

「表日本-裏日本」の視点から

太平洋-日本海軸に

服部 等作 (広島市立大学・芸術学研究所)

今回の震災は東日本だけの復興ですませられないだろう。新しい日本のランドデザインが必要だ。行政機能は、各地分散のほうが危機管理上よい。行政機能の分散の先行例は、すでに先の大戦をふまえて英国が実施し、今も機能している。

この案は、日本の基本軸をどうするかが問題となる。南北方向に細長い日本では、今回の震災を契機に、太平洋側と日本海側をむすぶ軸を考える視点が必要だ。実際に今回の被災地支援に際しての軸は、初期は、日本海側の陸路、鉄道網から太平洋・三陸側へ通じたルートにあった。古くからの表日本-裏日本という呼称が誤解を生む。この呼称は南北をくくった考えだが、この軸では一カ所が遮断されると弱い。今回南側からの支援がなかったわけではないし、一方で、太平洋-日本海側の軸にも、分水嶺として山地があるという弱点もある。しかし随所に太平洋-日本海側の軸は抜け道があり、基軸となる都市、港湾、空港、備蓄施設が点-線-面として存在する。太平洋-日本海側の軸は、つねに海に面し陸路の遮断にも強い。津波という災いを転じ点-線-面に開かれていることから新たな日本のランドデザインの視点になる。

地域医療の回復に課題

菅波 茂 (国際医療 NGO「AMDA (アムダ)」代表)

AMDAグループは福島県南相馬市、宮城県仙台市宮城野地区と南三陸町、そして岩手県釜石市と大槌町で避難所での診療と巡回診療を実施。被災しつつも診療を続ける地元医師を支援する形式で、全国からの、熱意あふれる149人以上の医療スタッフの派遣を4月30日まで続けた。

災害医療は救急救命に始まり避難所医療、地域医療(保険診療)、中核病院医療そして全体医療計画整備へと経時的に移行する。阪神大震災の時にも経験したが、一番困難なのが避難所医療から地域医療(保険診療)への移行だ。今回の問題は、地域医療を担う開業医の診療所と県立病院が壊滅しているの両者を再建しないと地域医療の回復が望めないことである。元来からの医療過疎の事情も、事を複雑化している。

「ピンチは最大のチャンス」。歴史に残るこの大災害に対して、国民は「困った時はお互いさま」の相互扶助の精神で絆を深めている。近い将来に懸念される東海、東南海そして南海地震などに対して一致団結して対処できると確信しているが、阪神大震災の地震被害と今回の津波被害に対する経験と知恵を生かした公共政策の早期実現が望まれる。

臨床心理士の考え

岡田 康伸 (京都文教大学教授)

東日本大震災で子どもに関するテレビの放送を見たり、新聞を読んだりして感じたことを中心に、臨床心理士としての立場から、震災に関する視点を述べたいと思います。

インタビューに、こどもの多くは律儀に、笑顔さえうかべるものもいるほどに、適応しているかのように、応じている。しかし、これは顔面通りに受けとってはならないと思う。子どもは大人以上に自分の気持ちを覆い隠し、いかにも適応できているように振る舞うこともある。心の奥深いところが傷つけられているために、自然に本当の気持ちを表すことができなくなっているのではないかと考えるのが、我々臨床心理士の常識である。マスコミの人たちがいくら注意深くこどもと接しているといっても、気づかぬうちに子どもの心を傷つけていることがおこっているのである。すでに、日本臨床心理士会と日本心理臨床学会と日本臨床心理士資格認定協会の3者が立ち上げた震災支援センターにもマスコミの目に余る取材への苦情が寄せられており、注意を促しているという。今は、子どもをそうっと静かにみまもっていることが大切である。子どもへのケアは長期に及ぶことを踏まえ、行政にも協力していただき、根気強く進めていく必要がある。

地域再生はリーダー育成から

土井 勉(京都大学大学院・安寧の都市ユニット特定教授)

今回の震災・津波・原発は私たちの国土、都市、生活のあり方を根本的に見直すことを迫っている。まず、被災された皆様に心からのお見舞いを申し上げたい。被災地の復興に関して、これまでまちづくりや交通計画に関わってきた筆者の経験を踏まえて以下の視点/私点を述べたい。

①多様な復興計画が地域ごとに必要。被災地は都市部～農林水産業や過疎地域など産業や自然、文化的背景が全く異なるため、一律の復興計画の押しつけは避けなければならない。被災地では行政機能も十分でない以上、復興計画作成には、全国から多様な分野の専門家の協働が不可欠であり、予算を含めた体制の構築が急務である。

②地域の再生にはコミュニティの再生が最重要課題である。そして、コミュニティ再生には地域のリーダーが不可欠となる。そこで、復興計画立案時の専門家集団の中に地域の専門家として住民を加えることが不可欠である。このことは地域のリーダーとなる人材育成にも大きな効果が期待できる。持続可能な地域コミュニティ形成に向けた活動こそが被災地再生のエンジンとなる。

「愛する人をなくすということ」

坂口 智美(フリーアナウンサー)

死者1万5千人、行方不明者9千人。東日本大震災は日本全体を危機的状態に陥らせた。私が一番気になるのは、大切な人を亡くした人たちの心の状態だ。今回の災害では、何人もの大切な方々を亡くした人も多いだろう。未だ行方不明者をかかえている家族は、いてもたってももてられないに違いない。心の闇は、身体までむしばんでしまう。

突然、愛する人を亡くすということ。状況は全く違うが、一年前に私は体験した。直後は事実を受け入れることだけで精一杯だが、生活が落ち着いてきた時に「悲嘆」が一気に襲ってくる。そして当然だが、自分と亡くなった人との関係性が深いほど、さらにその人への想いが強いほど悲しみは深い。心が折れてしまうとは、このことだ。そんな状態の時に何が必要か…? ただ、傍に居てくれるだけでいいのである。黙って一緒にご飯を食べてくれるだけでいい。そして、泣かせてあげてほしい。泣いて食べて眠って、そして初めて、少しずつ前を向いて歩いて行ける。むやみに「がんばれ」とは言わないで。生きているだけで本人は十分がんばっている。人を助けられるのは人である。だから、身近に悲しみにくれている人がいたら、こわがらずに寄り添ってみてほしい。あなたの存在そのものが、「光」なのだから。

スケッチかんさい



神戸市長田区若松町6丁目

鉄人28号で町おこし

東北の被災地の人々は、耐えながら復興の槌を打ち始めた。焦らずに一歩一歩築いていって欲しいと思う。ここ神戸・新長田駅前の若松公園内に、阪神淡路大震災からの復興を願うNPO法人が、ご当地出身の漫画家・横山光輝氏の代表作「鉄人28号」の鋼鉄製モニュメント(高さ18m)を建設した。アニメ文化とロボット産業の振興によって人々を呼び戻し、新たな交流を通して街づくりをしようというのが狙い。これも6つの商店街が団結し、15年の歳月を経て軌道に乗せたという。東北の被災地人たちも知恵を出し合って、新たなコミュニティづくりを示唆するところのモニュメントを創っていただき、これからの日本の先駆けとなって欲しいと思う。

あつた ちかよし
熱田 親憲

梅棹さんならどうみるだろう

柴田 直治 (論説副主幹)



昨年11月、10年ぶりに大阪に戻りました。梅田界隈はJRや阪急のビルが立ち上がり、随分様子が変わりました。中之島の弊社新ビルも建設が進み、渡辺橋を渡って出社するときの景色も日々、変化します。

それなのに、街全体で言えば、活気のなさが気になります。道頓堀川の護岸が整備され、ぐっときれいになったミナミも、以前に比べて人通りが少ない。

私は一昨年までの4年間、タイのバンコクに駐在し、東南アジアや南アジアをカバーしていました。帰国して肌で感じたのは、東京の寂しさでした。

ある日曜の晩、汐留の高層ビルで知人と食事をしました。午後9時過ぎに外に出ると、人通りがほとんどありません。日曜夜のビジネス街だから当然なのでしょう。でもあれほどビルや遊歩道が整っているながら人が見えないアジアの街はほかにどこにもありません。インフラはできていても、使う人がいないニッポン。貧しさを残しながらも、混沌としてエネルギーに満ちたアジアの街との違いです。

その東京が日本では一人勝ちとされています。

正月に「万博公園冬景色」という社説を書きました。少子高齢化の最先端を行く千里、全国一現役世代の減少が激しい大阪、そして人口減が現実化する関西。そうした地域の未来図を探り、エールを送るという意図でした。

書こうかなと思い立ったのは、久しぶりに歩いた万博公園の黄昏の風情が心にしみたことと、真ん中にある国立民

族学博物館が生みの親を亡くしたことがきっかけです。

同館初代館長の梅棹忠夫さんの死去を伝える昨年7月6日夕刊の記事につく顔写真は私が撮ったものでした。梅棹さんがインドシナ半島を探検してから50年がたつ2008年、「東南アジア紀行半世紀」という記事を連載した際、タイから出向いて取材させていただいた時に撮った写真です。

そんな経緯もあって梅棹さんの訃報には深い感慨を覚えました。関西に居ながら全国に、世界に強い発信を続ける人は、もうほかになかなか見あたらないからです。

私は梅棹さんを偉大なオプチミストと思っています。

敗戦時でさえ「いっぺん戦争にまけたというだけではないか。わたしはすこしも意気消沈していなかった。むしろ希望にみちて大陸からかえてきたのである」と振り返っています。その梅棹さんが阪神大震災の一年後、朝日新聞のインタビューに気になる言葉を残しました。

「21世紀の中ごろには、日本の経済はじり貧。バブルに浮かれて絶頂期に基礎体力を作ることを怠ったから。新世秩序構築のために日本の出る幕はない」

「文明の生態史観」でも示された通り、日本文明に信頼を寄せていた梅棹さんにしてこの悲観的な見通し。存命だったら、東日本大震災後の日本をどう見るか、聞いてみたいと思うのは私だけではないでしょう。(しばた・なおじ)

事務局から

■ 関西スクエア / 今年の企画 / ふるってご参加を ■

関西スクエアの今年度の企画をお知らせします。日程などが未定の企画については、追って連絡さしあげます。企画運営委員会を開催し、委員の方々にご提案・ご議論いただきました。

■ 6月12日(日)午後1時30分から 「東日本大震災シンポジウム／関西から元気を」
復興のために関西から何ができるのか、を話し合います。

場所／神戸朝日ホール(神戸市中央区浪花町59)

■ 7月31日(日)午後1時から 国際平和シンポジウム「核兵器廃絶への道」
場所／広島国際会議場(広島市)／広島市との共催

■ 9月下旬 公演とトークセッション「関西・大阪の都市文化を考える」／年間交流会
場所、日時は未定 大阪の歩みを語りと音楽映像で紹介する公演「なにわ語りべ」と、「関西の魅力と課題」がテーマのトークセッション。
年間交流会も開催します

■ 11月3日 明日香村(奈良県)ツアー

明日香村での古墳発掘調査で業績をあげ、第3回スクエア賞を受賞した西光慎治さん(同村教育委員会文化財課主任技師)が案内役。「古代の宝庫」である、村内の文化財や発掘現場を訪ねます。

関連企画／「明日香村文化財帰還展」(10月14日から11月27日)、「帰還展シンポジウム」(10月22日、エルシアター＝大阪・天満橋駅近く)。

朝日21関西スクエア 会報 No.135

●スタッフ

富永伸夫、浅野稔、安川嘉泰、小林正典、天野剛志、橋本正人、木村俊介、園真規子

●事務局

〒530-8211 大阪市北区中之島3-2-4 朝日新聞大阪本社内
TEL 06-6231-0131 (内線5048) FAX 06-6443-4431
E-mail square.k@asahi.com (PDF会報の希望はこちらへ)
URL <http://www.asahi.com/kansaisq/>